

ディーパンカラシュリージュニャーナの 『菩提道灯論細疏』和訳(5)

望月海慧

はじめに

本稿は、[望月2001]に続くものである。今回の和訳箇所は、「神通 (abhijñā; mngon par shes pa)」に関するセクションである。根本偈は、137-166 の28パーダ・七偈半である。

本節は、前節の「菩薩戒」のセクションから、次節の「二資糧」のセクションへの移項箇所であり、この部分の根本偈をまとめたものが第145パーダの解説部分に、次のように示されている。

次のように、完全なる菩提は二つの集まりに依存し、二つの集まりも利他に依存し、それはまた神通に依存し、神通も止に依存し、止も戒に依存しているので、最初に戒を示したのである。

この目的に従い、三昧を起こすことを述べた後に、根本偈に説かれる神通^{註3}の解

注1 今回の和訳箇所は、チョーネ版 Khi 278b3-283a3; デルゲ版 Khi 272a4-276b4; ナルタン版 Ki 309b6-315a3; 北京版 Ki 314a4-319b2; 金写版 Ki 432a3-438b4 である。前稿発表後、Sonam Raptan, *Satyadvayāvātārādīgranthacatuṣṭa*, Sarnath 2000 が出版された。また、ツルティム・ケサン [「中観ウパデーシャ」のヴァスバンドゥ二人説とアティーシャの中観の見解] (『印度学仏教学研究』50-1, 2001, pp.(223)-(229)) が発表された。筆者も、これと同じような論文を著そうと思ったことがあったが、宮崎1993を知り、断念した。この箇所を扱った宮崎の論文は、ディーパンカラシュリージュニャーナが当時にインド仏教をどのように分類していたのかを知る上で重要な論文である。なお、前者の論文の注1)では、BMDP がディーパンカラシュリージュニャーナの著書であることを疑う資料を提示している。

注2 Eimer 1978: 124 では、165-168 を一偈としている。

注3 Cf. 舟橋尚哉 [「大乘莊嚴經論」の一考察] (『印度学仏教学研究』42-1, 1993, pp. 214-218) .

説に移項していく。この神通は、具体的にはヨーガにより止を完成することで生起させられるものである。

本セクションに引用されるテキストでは、『聖発志楽所問経』とディーバンカラシュリージュニャーナ自身が師と述べているボーディバドラの『三昧資糧論』が特に際立っている。前者に関しては、その引用のすべてが、このセクションの最初の箇所^{註4}で引用されているシャーンティデーヴァの『集学論』においても引用されているものであることから、そこからの孫引きであると考えられる。これらのことから、根本偈に対する注釈は、『集学論』と『三昧資糧論』に基づいて展開していると言える。

また、ツォンカバの『ラムリムチェンモ』の止の章^{註4}には、『菩提道灯論』および『菩提道灯論細疏』のこの箇所からの引用が見られるものの、それほど重要視されている印象を受けない。この止の章をにおいて最も重要なテキストはカマラシーラの『修習次第』である。むしろ中観派思想の系譜を考えると、『菩提道灯論細疏』のこの箇所において、『修習次第』への言及が見られないことに違和感を感じてしまう。

Synopsis of the BPP based on gZhung don gsal ba'i nyi ma (5)

2.1.5.2 二資糧を完成させる原因を説いたもの

2.1.5.2.1 福德の集まりを完成させる原因

2.1.5.2.1.1 福德の集まりを完成させる原因であるものを説いたもの

[137-140]

2.1.5.2.1.2 その原因がない過失[141-148]

2.1.5.2.1.3 その原因を完成させる方法

2.1.5.2.1.3.1 その原因が完成させる目的の方法を説いたもの[149-152]

2.1.5.2.1.3.2 その原因が完成させるもの

注4 同論の止の章については、ケサン1991を参照。

3 ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(5)(望月)

2.1.5.2.1.3.2.1 原因である止を完成する利益[153-156]

2.1.5.2.1.3.2.2 完成しない欠点[157-160]

2.1.5.2.1.3.2.3 どのように完成するのか[161-166]

『菩提道灯論細疏』和訳(5)

次のように、何れかの戒だけでは〔菩提心は〕十分に保たれず、三昧と知恵も起こさなければならぬ。しかも戒に依存してから、三昧が生じるであろう。すなわち、『聖月灯三昧経』に、

煩惱のない三昧をすぐに得る。これが、清浄なる戒の功德である。^{#5}

と説かれている。規範師シャーンティデーヴァは〔『集学論』に〕、

戒は三昧を成立させるものである。^{#6}

と言い、また、

それ故に三昧の原因と結びつくものはいかなるものでも、それに適應するものは戒の中に収められると知るべきである。それ故に三昧のために努力するので、記憶と正智の本質をそなえるべきである。^{#7}

とお説きになられている。また、

戒のためにも、三昧に励むべきである。^{#8}

と言い、また、

戒のために二つのものを一つづつ増やし、この二つにより心を浄化する

注5 *Samādirājasūtra* XXVII 6cd, P. L. Vaidya, ed, Darbhanga 1961, p.160.23-24: kṣipraṃ samādhiṃ labhate niraṅgaṇaṃ

pariśuddha-śīlasyimi ānuśamsāḥ //

田村智淳・一郷正道訳『大乘仏典第11巻 月灯三昧経II』(中央公論社, 1975年), p.64. Cf. Śik, 121.2-3; BCP, p.117.1-2.

注6 Śik, p.121.1: śīlaṃ hi samādhi-saṃvartaniyaṃ.

注7 Śik, p.121.3-4:

ato 'vagamyate ye kecit samādhi-hetavaḥ prayogaṣṭe śīlāntargatā iti / tasmāt samādy-arthinā smṛti-saṃprajanya-śīlena bhavitavyaṃ /

注8 Śik, p.121.4-5: tathā śīlārthināpi samādau yatnaḥ kāryaḥ tatraiva sūtre vacanāt /

ことが完成する。^{#9}

とお説きになられており、戒のない三昧は生じることはないので、それ故に戒を努力しなければならない。したがって完全な戒の三昧により神通を起こしてから利他をなすべきであり、二種の集まりをまとめた方法が神通であるから、それを示すために、

福德と知恵を本質とする集まりが完全である原因を、一切の仏が神通を起こしたのものとしてお認めになられている。[BPP137-140]

と言うのがそれである。

二つの集まりを集めようとするのと、常に利他をなそうとすることにより、神通が起こされなければ、盲人の行いや、狂人の行いや、家畜の行いのように、自利も完成できずに、どうして利他也完成できようか。

というのは、まとめた後^{#10}に示したものである。

例えば翼が破れて広げることができない鳥は空を飛ぶことができないように、そのように神通を得ることを離れていれば、衆生の利益をなすことはできない。[BPP141-144]

神通も得ず、修習の知恵も生じずに、聞くことの知恵のみに依存してから法を解説し、弟子を集めたその方は、狂人である。すなわち【『入菩薩行論』に]、

自らの量も知らずに説く者は、どうして狂人ではないだろうか。^{#11}

と説かれている。『聖発志楽所問経』に、

説くことを喜ぶことと、説くことを喜ぶ罪を見るべきである。^{#12}

注9 Śik, p.121.10:

etābhyāṃ ca śīla-samādhībhyāṃ anyonya-saṃvardhanakarābhyāṃ
citta-karma-pariṇipattih.

注10 『菩提道灯論』の根本偈を完成した後に」という意味であろうか。

注11 BPP は、「力(stobs)」とする。「得る(thob)」との誤解はチベット語の文字の類似から生じたものであろう。

注12 BCA IV.42ab. Bhattacharya 1960: 50:

ātma-pramāṇam ajñātvā bruvan nun mattakas tadā /
金倉1965: 44.

注13 ASS Tib. Zi 140b2-3, Chin. T. No. 310(25), p.523c3, No. 327, p.47b15-16.
Cf. Śik, p.105.1-2:

bhāṣyārāma-parivarjitena bhāṣyārāma-doṣa-darśinā bhavitavyaṃ /

5 ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(5)(望月)

と説かれており、また同じ【『聖発志楽所問経』に]、話すことを喜ぶ罪をお説きになられたものが、

聞くことを自慢した後に、尊敬されないであろう。論争をなす者たちを愛し、失念し、正智がなくなるであろう。話すこと喜ぶ罪は、これらである。

内なる心からとても離れてしまい、身体と心も浄化されず、傲慢さと屈辱は多くなる。話すことを喜ぶ罪は、これらである。

童子が正法を思うことを損ない、心は柔軟でなく、荒くなり、止と観はとても速くなる。話すことを喜ぶ罪は、これらである。

常に師たちを尊敬することなく、卑猥な話にも喜びを起こし、悲心のないところに住し、知恵を損なう。話すことを喜ぶ罪は、これらである。^{註14}

[と、] そのようにまた説いたものが【『聖発志楽所問経』に]、

「私は成就を損なった今、何をなすべきだろうか」と、死の時に童子は嘆き、底に至ることなくとても苦しんでいる。話すことを喜ぶ罪は、これらである。

草がなびくように動き、彼は、そのように疑惑をもつことが確かになる。彼は、決して知恵が堅固にならない。話すことを喜ぶ罪は、これらである。

注14 ASS Tib. Zi 144b2-5, Chin. T. No. 310(25), p.525b2-9, No. 327, p.49a8-15.
Cf. Śik, pp.108.6-109.3:

agauravo bhoti śrutena matto /
vivādamantreṣu niviṣṭa bhoti /
muṣita-śrutis cāpi asaṃprajanyo /
bhāṣye ramantasya ime hi doṣāḥ //
adhyaṭma-cintāta surūra bhoti /
cittaṃ na kāyaś ca prasanna bhoti /
unnāmanāmāni bahūni gacchati /
bhāṣye ramantasya ime hi doṣāḥ //
saddharma-cittāttu praṇaṣṭu bālāḥ /
sukarkaśo bhoti asnigdha-cittaḥ /
vipaṣyanāyāḥ śamathāc ca dūre /
bhāṣye ramantasya ime hi doṣāḥ //
agauravo bhoti sadā gurūṇaṃ /
paligodhamantreṣu ratiṃ janitvā /
asārasthāyi parihīṇa-prajño /
bhāṣye ramantasya ime hi doṣāḥ //

舞踏を見る群集の前に座り、勇者が他者の功德を述べるままに、自分自身の熱心さを損なっている。話すことを喜ぶ罪は、これらである。

彼は偽善者でもあり、絶望しており、後々に後悔し、聖なる正法から遠くなる。話すことを喜ぶ罪は、これらである。

小さな力で尊敬されることを喜び、無知な者は、動くようになり、猿のようにその心は動くであろう。話すことを喜ぶ罪は、これらである。^{注15}

と出ており、また同じように [『聖発志楽所問経』に]、

長い間話すことを喜んでいるので、彼は自分自身が喜ぶことを得ない。何れかの言葉が究極なる喜びを得るものとなれば、一語だけを思うことも最高である。

砂糖きびの木の皮には、樹液は何もなく、喜びを与える味は中にある。皮を食べた人は、砂糖きびの味や甘味を得ることはできない。

木の皮とは、そのように話すことである。味のようなものは、この意味を考えることである。その如くなので、話すことを喜ぶことは捨てられ、

注15 ASS Tib. Zi 144b6-145a3, Chin. T. No. 310(25), p.525b14-25, No. 327, p.49a20-b2. Cf. Śik, pp.109.12-110.12:

sa śocate kālu karotu bālah /
 pratipatti hīno 'smi kimadya kuryāṃ /
 suduṣkhito bhoti alabdhaḡādho /
 bhāṣye ramantasya ime hi doṣāḡ //
 calācalo bhoti tṛṇaṃ yatheritaṃ /
 vicikitsate evaṃ asau na saṃśayaḡ /
 na tasya jātū dṛṣṭha buddhi bhoti /
 bhāṣye ramantasya ime hi doṣāḡ //
 naṣṭa yathā tiṣṭhati raṅgamadhye /
 anyāna śūrāḡaḡuḡāṇ prabhāṣate /
 svayaṃ ca bhoti pratipatti-hīno /
 bhāṣye ramantasya ime hi doṣāḡ //
 śaṭhoś ca so bhoti laghurnirāśaḡ /
 punaḡ punaś cārabhate vivādam /
 so dūrato ārya-dharmasya bhoti /
 bhāṣye ramantasya ime hi doṣāḡ //
 saṃhr̥ṣyate satkr̥ta alpasthāmaḡ /
 prakampate viprakṛto ajāni /
 kapiryathā cañcala-citti bhoti /
 bhāṣye ramantasya ime hi doṣāḡ //

7 ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(5)(望月)

常に不放逸をなし、意味を考えなさい。^{註16}

と説かれており、同じように〔『聖発志樂所問経』〕にさらに説かれている。^{註17}

それから世尊にマイトレーヤ菩薩摩訶薩が、次のように尋ねられた。

「最高の法を捨ててから悪行をなした菩薩は、知恵がとても小さく、知恵を損なうことになるのでしょうか」と。

そのように質問がなされ、世尊はマイトレーヤ菩薩摩訶薩に次のようにお答になられた。

「マイトレーヤよ、それはその通りである。最高の法を捨ててから悪行をなした菩薩は、知恵がとても小さくなるだろう。マイトレーヤよ、あなたに説かれている。あなたは領受すべきである。誰であれ精進がなく、禪定がなく、捨てることなく、読誦することなく、多くを聞こうとしない菩薩たちは、如来が説かれたものに出家した者ではない。マイトレーヤよ、如来が説かれたものは禪定と捨てることにより開かれ、知恵により作られ、知恵により心を禪定におき、明らかに励むことにより開かれるものであるが、在家の行為の限界と執事により開かれるものではない。論理的で

注16 ASS Tib. Zi 145a5-7, Chin. T. No. 310(25), p.525c1-6, No. 327, p.49b7-12. Cf. Śik, pp.110.13-111.4:

ramitva bhāṣyasmi ciram pi kalam /
na vindate pr̥timihātmasaukhyam /
varam hi ekasya padasya cintanaḥ /
pr̥tiṃ pade yatra labhedanantām //
nekṣutvace sāram ihāsti kiṃ cin /
madhye 'sti tat sāra supremaṇīyah /
bhuktvā tvadham neha punaḥ saśakyam //
labdhum nareṇekṣurasam pradhānam //
yathā tvacam tadvadavaihi bhāṣyam /
yathā rasas tadvadihāthar cintā /
tasmādbhi bhāṣye tu ratim vihāya /
cintetha artham sada apramattāḥ //

注17 G はこの句をもう一度繰り返す。

注18 「執事すること(zhal ta byed pa)」については、袴谷憲昭「悪業払拭の儀式関連経典雑考(III)」【駒沢大学仏教学部研究紀要】51, 1993年, pp.(1)-(40); 同「同(VI)」【駒沢短期大学研究紀要】24, 1996年, pp.(67)-(91); Jonathan Alan Silk, *The Origins and Early History of the Mahāratnakūṭa Tradition of Mahāyāna Buddhism with a Study of the Ratnarāśisūtra and related Materials*. PhD. Dissertation. The University of Michigan, 1994. を参照。

ないものを励み、輪廻を明らかに喜んでいる者たちの行為はこうである。すなわち、執事と世間のなしたことにより見る。そこには、菩薩たちが望むことは起こされない^{註19}。

とお説きになられている。師 [ボーディバドラ] も [『三昧資糧品』に]、

そのように、聞くことをそなえた菩薩は、法を述べることから退くべきである。すなわち、神通を得ていないで、聞くことだけでは、他者に対する利益を説いていない^{註20}。

と述べ、また [同じ『三昧資糧品』に] お説きになられている。

それ故に多く聞くだけでは法は説かれず、神通を得てはじめて利他がなされる^{註21}。

と述べ、また同じものに、

神通を得ていない弟子は、完全に熟することができずに、自分自身が死ん

註19 ASS Tib. Zi 149a5-b5, Chin. T. No. 310(25), p.527a26-b8, No. 327, p.50c24-51a5. Cf. Śik, pp.113.15-114.5:

atha khalu maitreyo bodhisattvo mahāsattvo bhagavantam etad acocat / suparīta-prajñāste bhagavan bodhisattvā bhaviṣyanti vihīna-prajñā ye 'gra-dharmān varjayitvā hīnāni karmāṅyārapṣyante // evam ukte bhagavān maitreyaṃ bodhisattvaṃ mahāsattvam etad avocat / evam etan maitreya / evan etad yathā vadasi suparīta-prajñāste bodhisattvā bhaviṣyanti ye 'gra-dharmān parivarjayitvā hīnāni karmāṅyārapṣyante / api tvārocayāmi te maitreya prativedayāmi te / na te bodhisattvās thathāgata-sāsane pravrajitā yeṣāṃ nāsti yogo nāsti dhyānaṃ nāsti prahāṇaṃ nāsty adhyayanaṃ nāsti bāhu-śruty-aparyeṣṭiḥ / api tu maitreya dhyāna-prahāṇa-prabhāvitam tathāgata-sāsanaṃ jñāna-saṃskṛtam jñāna-samāhitam abhiyoga-prabhāvitam / na grhi-karmānta-vaiyāpṛtya-prabhāvitam / ayukta-yogānām etat karma-saṃsārābhiratānām yad uta vaiyāpṛtyaṃ laukika-kṛtya-pali-godhaḥ / na tatra bodhisattvena spṛhotpādāyitavyā /

この引用は、SS (Pāsādika 1989: 95.1-9) と MSS (D. 48a2-b6, P. 54a3-55a2) にも引用されている。

註20 SSP, D. Ki 82a1-2, P. Gi 168b7-8:

de ltar thos pa dang ldan pa'i byang chub sems dpa' de chos smra ba la 'jug pa dgag par bya ste / mngon par shes pa ma thob par mang du thos pa tsam gysis gzhan la phan gdags par rgyal bsam gsungs te /

註21 SSP, D. Ki 82a7-b1, P. Gi 169a7-8:

de bas na mang du thos pa des thos pa tsam gysis chos smra bar mi bya bar de las ldog par bya zhing mngon par shes pa thob nas gzod 'gro ba'i don bya ste /

9 ディーバンカラシュリージュニャーナの【菩提道灯論細疏】和訳(5)(望月)

でしまう。^{注22}規範師シャーンティデーヴァ^{注23}が、

衆生は種々なる信解をもち、勝者も喜ばせることがないのに、どうして私のような者ができようか。それ故に世間を思うことは捨てられる。^{注24}

[と述べている。]^{注25}

と典拠を添えてから【三昧資糧品】にお説きになられている。それ故にこの意味を意図してから、規範師聖ナーガールジュナが【『宝行王論』に]、

いかなる生においても、それに従った五神通を得てから、常に一切衆生に対してあまねく利益と安楽をなすべきである。^{注26}

とお説きになられている。師の教誡なしに教義を聞くことだけに依ってから修習するそのことも、ここに禁じられている。すなわち、そのようなヨーガに励んでも、神通も生じないだろうし、完全な大菩提も得ないからである。この意味を意図してから、偉大なバラモンのサラハが【勝義の論理^{注27}】に、

「師の解説」というものは、甘露の味である。誰であれ満足していて
[それを] 飲まない人は、多くの論書の砂漠の真中で喉が渇くように、確

注22 SSP には、「自分を縛ってしまっている(rang 'ching bar zad do)」とある。

注23 SSP には、「同じ【入菩薩行論】に説かれている」とする。

注24 BCA VIII.22. Bhattacharya 1960: 141:

nānādhimuktikāḥ sattvāḥ jinair api na toṣitāḥ /
kiṃ punar māḍṛśair ajñais tasmāt kiṃ loka-cintayā //

金倉 1965: 128.

注25 SSP, D. Ki 84a2-3, P. Gi 171a2-4:

mngon par shes pa ma thob par slob ma yongs su smin par mi nus
kyi / rang 'ching bar zad do // ji skad du byang chub sems dpa'i
spyod pa la 'jug pa de nyid las gsungs pa /
sems can mos pa sna tshogs pa // rgyal bas kyang ni mi mgu na //
bdag 'dra ngan bas smos ci dgos // de bas 'jig rten bsam pa blang //
zhes so //

注26 *Ratnāvalī* V. 81, Hahn 1982: 160:

abhijñāḥ prāpnuyāt pañca sarvajanmānugāminīḥ /
sarvaśaḥ sarvasattvānāṃ kuryād dhitasukhe sadā //

瓜生津隆真「宝行王正論」【大乘仏典14 龍樹論集】(中央公論社, 1974年), p.313.

注27 *Don dam pa'i rigs pa*. 現時点で、このタイトルのテキストを確認できていない。

実に死ぬであろう。^{注28}

とお説きになられており、聖ナーガールジュナも、

多くのタントラを正しく聞き、聖典をよく繰り返し、師への尊敬が低いので、彼自身は聖教を得ていない。彼は自分自身のためだけに、能力なしに論書を口にしてている。それは、論書を悲痛する原因だけでしかない。^{注29}

とお説きになられている。

神通をもつ者の昼夜の [BPP 145]

などというこの二偈は、そのような長さのものである。次のように、完全なる大菩提は二つの集まりに依存し、二種のあつまりも利他に依存し、それはまた神通に依存し、^{注30}神通も止に依存し、止も戒に依存しているので、最初に戒を示したのである。^{注31}それ故に戒から止が生じ、止から神通が生じるので、

止を成立させずに、^{注32}神通は生じないであろう。それ故に止を完成させるために、何度も努力するべきである。[BPP153-156]

と言う。神通は、次のように天眼通と、^{注33}天耳通と、^{注34}他心通と、^{注35}宿命通と、^{注36}神足

注28 Eimer 1978: 183 によると、*Dohākośa* 57 であり、*Subhāṣitasamgraha* に
も引用されている。Bendall 1903: 384.2-3:

guru uvaesaha amia rasu havahi ṇa pīau jehi /
jaha sattheṇa marutthalihim tisia mariau tehi //

注29 現時点で、引用の確認はできていない。

注30 BPP 145-152:

神通をもつ者の昼夜の福德は、神通を離れた者には百の生においても存在しない。
すぐに完全なる菩提の集まりを完成しようとする者は、努力して神通を完成させる
であろうが、怠惰によりなされるものではない。

注31 BMDP の金写版は、この句を欠く。

注32 BMDP のチョーネ版とデルゲ版は、「神通に依ってから」を欠いている。

注33 立花1968: 328.

注34 BMDP のチョーネ版とデルゲ版は、BPP 153 を引用しない。

注35 Cf. 山口努『般若経』における天眼通について』『印度学仏教学研究』33-1, 1984
年, pp.351-354, 同『十地経』における天耳通について』『宗教研究』267, 1986, pp.
169-171.

注36 Cf. 山口努『般若経』における天眼通について』『印度学仏教学研究』33-1, 1984
年, pp.351-354

注37 Cf. 山口努『般若経』における宿命通について』『真野龍海博士頌寿記念論文集
般若波羅蜜思想論集』(山喜房仏書林, 1992年), pp.25-45, 同『宿命通における心と
かたちについて』『日本仏教学会年報』57, 1992年, pp.59-71.

11 ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(5)(望月)

通と、漏尽通とである。^{注38} そのようなそれらの神通は止から生じるので、止を完成させなければならない。すなわち、

止の支分を損なっている者は、努力して修習したとしても、千年にわたっても三昧は完成しないであろう。^{注40} [BPP157-160]

「止の支分」とは、師[ボーディバドラ]が著した『三昧資糧品』の捨てられるべきものなどの九つである。[根本偈の]他の部分は理解しやすい。それ故に支分を損なっていれば、止を完成することはないので、私の師である吉祥なる尊者ボーディバドラが『三昧資糧品』に九つの支分^{注41}をお説きになられたものについては、

次のように「捨てられるべきものと、前行と、退けるべきものと、苦悩を断じることと、満足しないことと、功德を憶えていることと、精進をなすことと、関係すべきことと、住する方法である」と言われる。そのように支分を知って、それをよく存続させるべきである。^{注42}

と師がお説きになられている。それらの意味は『三昧資糧品』自身を見るべきである。^{注43}

注38 Cf. 山口努『『般若経』における如意通について』『今西順吉教授還暦記念論集インド思想と仏教文化』(春秋社, 1996年), pp.(319)-(327), 同『『十地経』における如意通について』『印度哲学仏教学』15, 2000, pp.70-85.

注39 三明から六神通への展開については、榎本文雄「初期仏典における三明の展開」『仏教研究』12, 1982年, pp.75-77, を参照のこと。

注40 この偈は、LRC (K. 292b2-3) に引用されている。ケサン 1991: 151.

注41 Sherburne 2000: 214, n.13 は、チベットでよく知られている『声聞地』(*Śrāvaka-bhūmi*, Skt. Shukla ed., pp.363.11-13; Tib. P. No. 5537, Wi 160b7-8; Chin. T. No. 1579, p.450c18-20)に説かれる「九種心住」が説かれぬのは注目すべきであるとす。Cf. ケサン 1991: 234.

注42 SSP, D. Ki 80a3-4, P. Gi 166b6-7:

de la ting nge 'dzin gyi tshogs kyi yan lag ni rnam pa dgu ste /
spang bar bya ba dang / sngon du 'gro ba dang / ldog par bya ba
dang / gdung ba bcad pa dang / yid 'byung bar bya ba dang / yon
tan rjes su dran par bya ba dang / brtson par bya ba dang / 'brel
par bya ba dang / gnas pa'i thabs zhes bya ba rnamso //

注43 BPP 161-162:

それ故に『三昧資糧品』に説かれた支分によく存在する。

なおこの偈は、LRC (K. 298a3-4, 302a2) に引用されている。Cf. ケサン 1991: 162, 169.

ここでも最後の支分の意味を少しばかり書かなければならない。すなわち、師が『三昧資糧品』に次のように、

そのように八支をそなえた人は、場所に相応した食物と、行道に相応した衣服と、友人に相応したものを具えたならば、心を平静にするべきである。^{註44}

と言い、またお説きになられて、

彼が平静に瞑想をなさない場合も、『般若経』を読んだり、小さい仏像や[そのまわりを]囲むものなどの福德の集まりを励むべきである。^{註45}

と言い、またお説きになられて、

心を平静に瞑想しようとする人は、捨てることの八つの行を修習すべきであり、それに従わない法はこうである。[[中辺分別論]に、]

五つの過失とは、怠惰と、教えられたことを忘れることと、[意識の]沈み込みや昂りと、^{註46}なさないことと、なすことである。これらが五つの過失と認められる。^{註47}

[と説かれており、] それらの対立する八つの捨てる行も [[中辺分別論]に、]

依存されるものと、それに依存するものと、原因であるものと、結果であるものとである。対象を忘れないことと、沈み込みと昂りを理

注44 SSP, D. Ki 87a7-b1, P. Gi 174b6-7:

de ltar yan lag brgyad dang ldan pa des gnas rjes su mthun par kha zas dang spyod lam rjes su mthun pa dang / gos dang grogs rjes su mthun pa dang ldan par byas la sems mnyam par gzhas par bya'o //

注45 SSP, D. Ki 89b3, P. Gi 177a5:

des mnyam par ma bzhag pa na shes rab kyi pha rol tu phyin pa bklags pa dang / tsha tsha gdab pa dang / bskor ba la sogs pa bsod nams kyi tshogs la gus pa nyid du bya ste //

注46 Cf. 小谷信千代「沈み込み(bying ba)と昂り(rgod pa)」(『仏教学セミナー』50, 1989, pp.30-45) .

注47 MVK IV. 4:

kausīdyam avavādasya saṃmoṣo laya uddhataḥ /
asaṃskāro 'rtha saṃskāraḥ pañca doṣā ime matāḥ //

長尾 1976: 301.

13 ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(5)(望月)

解することと、それを捨てようと明らかにすることと、止の際にヨー
ガに入ることである。^{注48}

[と述べられている]。^{注49}

とお説きにいられている。^{注50} [[大乘] 莊嚴經論] にも、

第一のものは努力することであり、第二は利益自身であり、第三は捨て
ることであり、第四は対立するものである。^{注51}

と説かれている。

また [別の過失を] 解説する。すなわち、欲望を望むことと、害心と、昏睡
と、睡眠と、笑うことと、後悔と、疑惑とである。そのうち昏睡と睡眠との周
辺のものは、吐き気や、不快や、欠伸や、食物の量を把握できないことや、た
るんだ心などである。行為は、心をたるませることである。対立項は、顕現す
る想である。笑うことと後悔との周辺のものは、親族の思慮や、以前に笑った

注48 MVK IV. 5:

āśrayo'rthāśritas tasya nimittam phalam eva ca /
ālambane 'saṃmoṣo layāuddhatyānubuddhyanā /
tad-apāyābhisamskārah śāntau praśaṭha-vāhitā //

長尾 1976: 302-303.

注49 SSP, D. Ki 90a1-3, P. Gi 177b3-6:

de ltar sems mnyam par 'jog pa des nyes pa lnga spong ba'i phyir
spong ba'i 'du byed brgyad bsten par bya ste / de la nyes pa lnga ni
dpus dang mtha' rnam par 'byed pa'i tshig le'ur byas pa las /
le lo dang ni gdams ngag rnams //
brjed dang bying dang rgod pa dang //
'du mi byed dang 'du byed de //
'di dag nyes pa lngar 'dod do //
zhes gsungs so // de dag gi gnyen po spong ba'i 'du byed brgyad
kyang de nyid las gsungs te /
gnas dang de la gnas pa dang //
rgyu dang 'bras bu nyid du'o //
dmigs pa brjed par ma gyur dang //
bying dang rgod pa rtog pa dang //
de spong mngon par 'du byed dang //
zhi tshe rnal du 'jug pa'o //

zhes so //

注50 Cf. LRC (K. 316b2-317b1); ケサン 1991: 197-199.

注51 MSA XVIII. 53, Levi ed., p.142.23-24:

vyāvasāyika ekaś ca dvityīyo 'nugrahātmakaḥ /
naibandhikas tṛtīyaś ca caturthaḥ prātipakṣikaḥ //

宇井伯寿『大乘莊嚴經論研究』(岩波書店, 1961年), p.444.

り喜んだりしたことや遊んだりしたことを思い出すことである。行為は、心を平静にしないことである。対立項は、止である。

何らかの適当な一つの対象に対して、意をよく設定すべきである。[BP P163-164]

「対象」とは、心の対境である。すなわち『中観心論』に、

意という道から離れて歩く象は、対象という棒杭に記憶という網により縛られている。心は、止さに置かれるべきである。^{注52}

と出ている。「何らかの適当な一つものに対して」とは、特徴をもつ止と、特徴のない止とである。それも師が『三昧資糧品』に、

次のように、ここに止は二つである。すなわち特徴をそなえたものと、特徴のないものとである。特徴のあるものに二つある。^{注53}内部に見られるものと、外部に見られるものとである。内部に見られるものに二つある。すなわち、身体を対象とするものと、身体に依存するものを対象とするものとである。身体を対象とするものに三つある。すなわち、身体自身を天の相として対象とするものと、骸骨などを不浄な相として対象とするものと、天杖などを特別な特徴として対象とするものである。身体に依存するものには五つある。すなわち、呼吸を対象とするものと、微細な特徴を対象とするものと、精液を対象とするものと、光線の支分を対象とするものと、喜びや楽しみを対象とするものである。外部に見られるものに二つある。すなわち、特殊なものと、共通なものとである。特殊なものに二つある。身体を対象とするものと、口を対象とするものとである。これが止に入る

注52 *Madhyamakahrdayakārikā* III. 16, 江島1980: 272 (Tib. P. No. 5255, Dza 4b, No. 5256, Dza 61a4):

nibadhyālamḃana-stambhe smṛtirajjvā manogojam /
unmārga-cāriṇam kuryāt prajñāhkuṣa-vaṣam śanaiḥ //

和訳は、江島1980: 413 を参照。ただし、この引用は最後のバーダが原文「徐々に智恵の」とは異なっている。なお、この偈は LRC (K. 304b5) にも引用される。ケサン 1991: 174.

注53 SSP は、有相・無相の二種に関する記述はなく、「止は二つである」とする。

15 ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(5)(望月)

支分である^{注54}。

と言われ、特徴のない止は、また同じものに、

特徴のない止である観察知から、特徴のない観である無分別が生じる、
と言う^{注55}。

と言われ、また同じものに、

特徴をそなえた止に依存するものより、特徴のない止を対象としてから
観を起こすというこの主張は賞賛される。何故ならば、そこにあるものを
堅固にし、何らかの止により煩惱が除かれ、よく征服することにより、そ
れは結果に相応する原因となるからである^{注56}。

とお説きにいられている。また同じものに、

例えば修習は、ここでは述べない。何故ならばテキストが大きくなるこ
とを恐れているからであり、聖なる師が領受した解説に頼ることは正しい

注54 SSP, D. Ki 90a3-7, P. Gi 177b6-178a2:

'dir zhi gnas de ni gnyis te / kha nang du bltas pas thob pa dang
kha phyir bltas pa la dmigs pa'o // de la kha nang du bltas pa la
yang gnyis te / lus la dmigs pa dang / lus la brten pa la dmigs
pa'o // de la lus la dmigs pa la gsum ste / lus nyid la lha'i rnam
par dmigs pa dang / keng rus la sogs pa mi sdug par dmigs pa
dang / kha t̥wām ga la sogs pa mtshan ma khyad par can la dmigs
pa'o // lus la brten pa la dmigs pa yang lnga ste / dbugs la dmigs
pa dang / mtshan ma phra mo la dnigs pa dang / thig le la dmigs
pa dang / 'od zer gyi yan lag la dmigs pa dang / dga' ba dang bde
ba la dmigs pa'o // kha phyir bltas pa la dmigs pa la yang gnyis
te / khyad par can dang / phal pa'o // de la khyad par can la
yang gnyis te / sku la dmigs pa dang / gsung la dmigs pa'o // 'di
dag ni zhi gnas la 'jug pa'i yan lag go //

この文章は、LRC (K. 300a6-b3) において、「『菩提道灯論細疏』にも引用されて
いる」として、引用されている。Cf. ケサン1991: 166-167.

注55 SSP, D. Ki 90b5, P. Gi 177b6-178b1:

mtshan ma med pa'i zhi gnas so sor rtog pa'i shes rab nyid las
mtshan ma med pa'i lhaq mthong rnam par mi rtog pa'i ye shes
'byung ste /

注56 SSP, D. Ki 91a3-4, P. Gi 178b8-179a1:

de bas na mtshan ma dang bcas pa'i zhi gnas la brten pa bas ni /
mtshan ma med pa'i zhi gnas la dmigs nas lhaq mthong bskyed pa'i
phyogs 'di bsnags te / de'i gnas pa brtan pa dang / zhi gnas 'ba'
zhig gis nyon mongs pa rab tu gnon cing sel ba dang / 'bras bu dang
rjes su mthun pa'i rgyu yin pa'i phyir ro //

が、修習の解説は文字に依るので、知り難いからであり、正確には止と観を説いてから解説されるからである。^{注57}

とお説きになられている。

「そのようなヨーガ行者が止を完成させた後に、前に説明をした五神通を完成することには疑いはない」、と師が仰っている。^{注58}

さらにまた、神通を起こす方法となる『聖観世音所問七法経』^{注59}に出ているそれらの学ぶべき基本も領受すべきであり、その經典自身を時々繰り返し読むべきである。聖アサンガも、

菩薩が神通をすぐに得ようとするので、日中三度、夜三度帰依をなし、供養し、罪を懺悔し、随喜し、勧請し、お願いをし、回向することに励むべきである。^{注60}

とお説きになられている。

さらにまた、少欲と知足と、粗食と、閑寂などが止の集まりのすべてをそなえている。そのようなヨーガ行者が止によく止まることが、少欲と知足を完成させる。すなわち、『十万頌般若経』^{注61}に、

禪定を思うことが僅かな内向的比丘たちは、服への想いも僅かで、食への想いも僅かで、皮膚の色は滑らかである。^{注62}

注57 SSP, D. Ki 90a7-b1, P. Gi 178a2-4:

ji ltar bsgom pa la 'dir mi brjod de / gzhung shin tu mang por 'gyur bas 'jigs pa'i phyir dang / bla ma dam pas nyams su myong ba'i man ngag la brten par rigs kyi / bsgom par bya ba'i man ngag ni yi ger gnas pa'i shes par dka' ba'i phyir dang / zhib tu ni zhi gnas dang lhaq mthong bstan pa las bshad pa'i phyir ro //

注58 BPP 165-166:

ヨーガ行者が止を完成していれば、神通も完成するであろう。

注59 *Avalokiteśvaraparipṛcchāsaptadharmakāsūtra*. Tib. P. No. 817 (tr. by Dipaṅkaraśrījñāna, dGe ba'i blo gros).

注60 引用の確認はできていない。これは BMDP において、すでに一度引用されている。望月 2001: 27.

注61 *Dipaṅkaraśrījñāna* と *Śtasāhasrikāprañāpāramitāsūtra* との関係については、望月2001c, Mochizuki 2002 を、彼のテキストにおける般若経の引用については、望月 2002 を参照。

注62 現時点で、引用の確認はできていない。Sherburne 2000: 214, n.28 は、Śik, pp.196-197 を指摘している。

とお説きになられており、そのような菩薩のそのヨーガ行者は、世間の富への執着を捨ててから聖なる七つの宝のために励んでいる。彼は、六つの随念を作業している。六つの中でもまず仏と法とサンガを随念することであって、[それは] 鋭い能力の者と鈍い能力の者との区別による。鋭い能力の者が随念をなすべきことは、『聖般若経』や、『聖仏随念経』^{注63}や、『聖虚空藏経』^{注64}や、『聖無尽慧経』^{注65}などを観るべきである。それに対して鈍い能力の者が随念するべきことは、『聖信力入印法門経』^{注66}や、『聖仏集讃経』^{注67}や、同じ『聖仏随念経』や、小さい『仏随念経』^{注68}や、他の大乘経典を見るべきである。

さらにまた、経典が意図するものを説明しているのので、『集学論』の「三宝を随念する章」^{注69}も見べきである。そのようなそのヨーガ行者には観も生じることが、この意味は後で説明をするであろう。それ故に止と観のためにヨーガをなすことは、「道に止まること」と言われるので、四念住と、四正断と、四神足と、[五] 根と、[五] 力と、[七] 菩提分と、八聖道支に順序通り止まるであろう。意樂の学すべきことを示した。

注63 *Buddhānusmṛti*. Tib. P. No. 945.

注64 *Gaganagañjaparipṛcchāsūtra*. Tib. P. No. 815, Chin. T. No. 397 (8), No. 404.

注65 *Akṣayamatīnirdeśasūtra*. Tib. P. No. 842, Chin. T. No. 397(13), No. 403. J. Braarvig, *Akṣayamatīnirdeśasūtra*, 2 vols, Oslo 1993.

注66 *Śraddhābalādhānāvātāramudrāsūtra*. Tib. P. No. 867, Chin. T. No. 305.

注67 *Buddhasaṃgītīsūtra*. Tib. P. No. 894. ただし BMDP は、「仏集讃・法集讃・僧集讃経(sangs rgyas bgro ba dang / chos bgro ba dang / dge 'dun bgro ba'i mdo)」とする。これがここにあげた経典とは異なる一つの経典か三つの経典かは不明である。おそらく、次の『仏随念経』には、『法随念経』と『僧随念経』が知られていることから、こちらとの混乱が生じたのではないだろうか。『三宝随念経』に関しては、アサンガに帰される注釈書が存在する。Cf. 合田秀行「無著における *Buddhānusmṛti* について」(『印度学仏教学研究』44-1, 1995, pp. (108)-(111))、「無著における *Samghānusmṛti* について」(『精神科学』36, 1997, pp. 79-92)「無著における *Dharmānusmṛti* について」(『印度学仏教学研究』46-2, 1998, pp. (95)-(99))。

注68 いずれの経典を指すのか、確認できない。おそらく合田前掲論文に指摘されている「三随念行」として初期経典に散見されるものことであろう。Cf. *Dighanikāya*, PTS ed., p. 93.17-20:

iti pi so bhagavā arahaṃ sammā-sambuddho vojja-caraṇa-sampanno
sugato loka-vidū anuttaro purisa-dhamma-sārathi satthā deva-
manussānam buddho bhagavā.

注69 Śik, XVIII, ratna-trayānusmṛtir-nāmaṣṭādaśa-paripṛcchā.

文献と略号(前稿に続く)

- ASS *Adhyāśayasamcodanasūtra*. Tib. P. No. 760 (25), Chin. T. No. 310(25), No. 327.
- Bendall 1903 Cecil Bendall, *Subhāṣita-Saṃgraha. Le Museon*, N.S. IV, pp. 375-402.
- Bhattacharya 1960 Vidhushekhara Bhattacharya, *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva*, Calcutta.
- 江島1980 江島恵教『中観思想の展開』春秋社.
- Hahn 1982 Michael Hahn, *Nāgārjuna's Ratnāvalī Vol. 1*, Bonn.
- 望月2001 望月海慧「ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(4)」「身延山論叢」, pp.1-31.
- 望月2001b Id., 「ディーバンカラシュリージュニャーナの【大経集】に引用される正法念処経」【(身延山大学東洋文化研究所) 所報】5, pp.(1)-(53).
- 望月2001c Id., 「Atiśa の *Śatasāhasrikāprajñāpāramita* について」【身延山大学仏教学部紀要】2.
- 望月2002 「アティーシャと般若経」【宗教研究】321, pp.185-186.
- Mochizuki 2002 Kaie Mochizuki, On the *Śatasāhasrikāprajñāpāramita* of Atiśa, 【印度学仏教学研究】 , 50-2. pp. (39)-(45) .
- SSP *Samādhisambhāraparivarta* by Bodhibhadra. Tib. D. No. 3924, P. No. 5319, No. 5444.
- 立花1968 立花孝全「Atiśa における大悲および浄戒」【印度学仏教学研究】16-2, pp.325-331.

(本研究は平成13年度日本學術振興會科学研究費「奨励研究(A)」による研究成果の一部である)